

## イスパニョーラ島二つの国の径路

——ドミニカ共和国とハイチ周回覚え書——

野 間 晴 雄

### 一 ひとつの島・ふたつの国

地形や生態系としては島全体がほぼ一体なのに、国境によって分かれた二つの独立国が際立った社会的・経済的な格差や文化の違いをみせる希有の例がカリブ海域、大アンティル諸島にある。カリブ海域ではキューバ島に次ぐ大きな島イスパニョーラ島（スペイン語「*Espanola*」、フランス語・英語 *Hispaniola*）のドミニカ共和国<sup>①</sup>とハイチ共和国（以下、ハイチと記す）である。島の東の三分の二をドミニカ共和国が、西の三分の一をハイチが占める。一四九二年のコロンブス第一回航海で「発見」されたイスパニョーラ島は面積七万六一九二平方キロメートルで、北海道（七万七九八四平方キロメートル）よりやや小さい（世界第二十三位）海洋島（洋島<sup>②</sup>）である。

一時期はスペインが全島を領有していたが、その後の帰属や実効支配は両国ともスペイン、フランス、アメリカ合衆国とめまぐるしく変わり、そこにイギリスやオランダも関与してくる。「略奪の海」と呼

ばれ、海賊が跋扈したイメージが強いカリブ海域（桃井治郎 二〇一七）、西インド諸島では、このような変遷は驚きに値しない史実ではある。ただ、イスパニョーラ島の場合、スペインとフランスという旧宗主国が島内でも長い間衝突を繰り返してきたことは特記される。両国とも、もとは一次農産品の砂糖やコーヒーを欧米に輸出するプランテーション型の植民地であった。さまざまの外国勢力の圧力や複雑な対立感情、自然条件の差異によって、一九世紀以降、両国は異なる性格の国民国家として歩んできた。

最初の境界（*boundary*）が一六九七年のライスワイク条約<sup>③</sup>によって確定した。その後、スペインは入植者に開拓をまかせたが、フランスは多くのアフリカから黒人奴隷をサンドマング（*Saint-Domingue*）に導入して砂糖プランテーションを発達させた。そのため、奴隷人口が優勢となり、現在の民族構成の両国の顕著な相違となっている。境域確定後も境界を越えての侵入や紛擾がきわめて多い。一八一四年にパリ条約でドミニカ共和国がハイチから独立宣言したときに国境が定められたのちも両国は小競り合いが続き、ようやく一九二九年に現在の

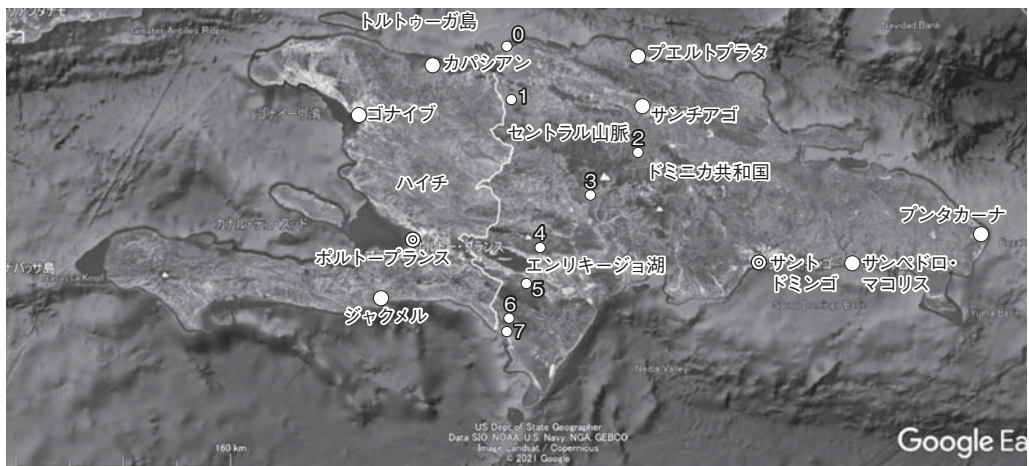
国境が確定する<sup>①</sup>。それ以降は島の二つの領域の変更はない。

しかし、一九三七年、ドミニカの独裁者トルヒージョ (Rafael Trujillo) は、国境付近に居住する耕作者や出稼ぎのハイチ人を大虐殺した。現在まで続くハイチからドミニカ共和国へ一方的な人流が引き起こす軋轢によって、両国の対立はなお根深いものがある。両国は現在一〇倍を超える経済格差があるが、ハイチからドミニカへの日常の物流や交流は、出稼ぎ者の流動を除くときわめて少ない。不法入国を回避するため、ドミニカによる国境の壁建設さえ始まっている。

言語ではハイチが旧宗主国のフランス語のほかハイチ・クレオール語も公用語としているのに対して、ドミニカ共和国は旧宗主国の言語のスペイン語のみが公用語である。民族構成もドミニカ共和国がムラート七三パーセント、ヨーロッパ系一六パーセント、アフリカ系一パーセント、ハイチがアフリカ系九五パーセント、その他五パーセントと大きく異なる。

島の中央山地を縫うようにして走る境界の東側はスペインによって、同島の西側はフランスによって統治されたため、その後四〇〇年間にわたり両地域の歴史や経済は、言語、文化、社会システムが旧宗主国を反映しているのみならず、一九世紀末から二〇世紀にかけて流入してきた中国、レバノン、ユダヤ、イギリス、フランス、スペイン、インド、アメリカ（とくにプエルトリコ）、日本などからの人流によって、さらなるクレオール化の様相を呈している。

キューバ島は島の大半が二〇〇メートル以下のなだらかな起伏の丘陵地や平野が占めるのに対して、イスパニョーラ島には五つの大きな山脈が走り、島の四分の三は険しい山地となっている（図1）。西イ



0. マンサニョ 1. ダハボン 2. ハラバゴア 3. コンスタンサ  
4. ネイバ 5. ドゥベルヘ 6. アルタグラシア 7. アグアネグラ

図1 イスパニョーラ島と現在の国境線  
(Google Earth に筆者地名を追記)

ンド諸島最高峰のピコ・ドウアルテ (Pico Duarte、三〇八七メートル) はドミニカ側にあり、二〇三〇〇メートル級の山岳が島内にいくつも分布する。熱帯ではあるが、コンスタンサなどの高原都市では高山性のしのぎやすい気候となっている。ただし、沖積平野は島内の五つの山脈のあいだに断続的に広がるにすぎない。

## 二 緊迫の旅囊

この小文は、ほとんど予備知識もないなか、単独で両国を短期間周回した際の見聞を、後日、文献等で咀嚼し補いながら、現在、なぜこれほどまでに二国の顕著な差異が際立ってしまったかを、フィールドと歴史を往復しながら小考した覚え書である。私は二〇二〇年三月に短期間であるがこの二つの国を陸路で左まわりに周回し、国境を二回越えた<sup>5)</sup>。今回の調査旅行は、折しも世界中で新型コロナウイルス感染拡大が大きなニュースになって、ひとびとの恐怖や不安が増すなかで緊迫したものだ<sup>6)</sup> (野間晴雄 二〇二一)。

往路はまだアメリカ合衆国のニューヨークでの乗り継ぎの際の検疫もさほど厳しくなかった。しかし三月一日に世界保健機関 (WHO) がパンデミック宣言をし、三月一六日にはトランプ大統領がアメリカ国民に対し移動制限の指示をした。こういうニュースが刻々と入るなか、常にテレビやネット情報を凝視しながらの移動であった。

復路はまだサンドドミンゴの空港では少数の乗客がマスクを着用していたにすぎなかったが、ニューヨーク市はまさに国内感染拡大の中心地になりつつあった時期で、トランジットとはいえ市内に宿泊する

のは憚れた。幸い、今回のフライトがユナイテッド航空であり、ニューヨークのハブ空港がニューヨーク州に隣接するニュージャージー州のニューアーク・リバティー国際空港 (Newark Liberty International Airport) であったことが幸いした。なんとかニューアーク市内の空港隣接のホテルに宿泊できて、成田へ予定通り戻ることができた。そして、ニューヨーク州のロックダウン (都市封鎖) が三月二二日の夜からが始まった。

ただ、今回の主目的は産業遺産としてのサトウキビプランテーションや製糖技術史をカリブ海域で比較することにあつたが、これに関しては十分な資料を集めることができなかった。何よりも、両国とも砂糖はもはや主要な輸出品ではない。現在も農業人口比率がなお五割と高いハイチですら、砂糖生産は、そのGDPに占める比率がきわめて小さい。ただ歴史を遡ると、一八世紀のサンドマンダ (現在のハイチ) は、世界一の砂糖生産地であった。ハイチとして独立した一八〇四年以降、砂糖の国際価格の低迷を補完するために導入されたコーヒー生産においても、ブラジルが台頭するまでは世界の主要産地であった輝かしい歴史をもつ。それがいまやドミニカ共和国の東部で行われている砂糖プランテーションでの季節労働力や移民労働力をハイチ人が担っているが、ハイチ本国での砂糖栽培はもはや見る影もない<sup>7)</sup>。かつてあつたアメリカ資本のポルトーブランスの製糖工場も廃止されてしまった。これらに関しては、今後、膨大にある歴史文献資料を少しずつ読み込みながら、カリブ海域のプランテーションをグローバルに位置づけていきたい。以下、周回した順に見聞メモを記す。

## (一) サントドミンゴ

二〇二二年三月六日に成田からニューヨーク経由でドミニカ共和国の首都サントドミンゴ (Santo Domingo) にはいった。ここは、コロンブスの弟、バルトロメ・コロンが一四九六年、スペイン国王の後ろ盾のもと、新大陸で最初に本格的な建設をした植民都市である。ただし、コロンブスが一四九二年、最初に上陸したのは島の北岸である。そこに最初の植民都市プエルト・イサベラを建設し、内陸のシバオ (Cibao) 地方探検を行い、金鉱を発見する。その後は砂金採取で顕著な成果が得られなかった。そのため、スペインから南米・中米への探検の拠点として、島の南岸、オマサ川河口に恒久的な植民都市サントドミンゴを建設する。その統治をまかされたのが、コロンブスの次弟のバルトロメと息子のデイエゴ・コロンであった。<sup>9)</sup>

一四九六年、バルトロメによって島の南岸でサントドミンゴの建設が開始される。その原型はオマサ川河口東岸のヌエバ・イサベラだが、ハリケーンによって破壊され、対岸に、ニコラス・デ・オバンドによって一五〇二年に新たに建設されたのがサントドミンゴである。一九九〇年に世界文化遺産に登録されたソナコロニア (Zona Colonial) 地区には、新世界最初の教会として一五一四年建設のアメリカ大聖堂 (Catedral Primada de las Americas)、サンタ・マリア・ラ・メノル大聖堂がある。内部はスペインのセビージャ (Seville) の教会様式を踏襲した大理石のリブ・ヴォールト (rib-vault)<sup>10)</sup> が美しい。その正面のコロン広場にはクリストファー・コロン (コロンブス) の像がそびえる (写真1)

オマサ川に沿っては最古の要塞 (Fortaleza Ozama) があるオマージ

ュ塔 (Torre del Homenaje) は、当初は時計塔として建設され、のちには監獄として利用された (写真2)。このソナコロニアの現住人口は約二万人で、多くの観光客が訪れる歴史景観保全地区となっている (写真3)。バルトロメの邸宅跡、大学、修道院などが南北三筋の道路に沿って立地する。スペイン植民都市は教会を中心とした中央広場 (プラサ・マヨール) とグリッドパターンの街路が特徴である。サントドミンゴでは、プラサ・マヨールの敷地内に入り込んだ形で大聖堂が建つ古形とされる (布野修司、ヒメネス・ベルデホ、ホアン・アラン 二〇一三、二〇五―二二頁)。完全なグリッドパターンではなく、地形に既定されて変形しているが、その理念は生きている。ここが新大陸におけるスペイン支配の初期の拠点となった。

新市街は旧市街の北と東西にのびる。右岸側には、官庁街、ショッピングモール、高級住宅地がひろがる。北部やオマサ川左岸側の東部には一般住宅が拡大している。それに沿って二〇〇九年には中央アメリカ最初の市営地下鉄がスペインの援助と技術で、標準軌で開通した。現在、南北の一号線と東西の二号線三キロメートルが開通している。市内交通の渋滞や市北部の低所得住民の重要な足となっている。写真4は二号線のエドアルド・ブリスト駅からクルス・シャルル・ド・ガレ駅までの五キロメートル (途中三駅) をむすぶ二〇一八年完成のロープウェイと郊外の景観である。オマサ川の湿地に立地するスプロール化したスラムを空中から眺めることが出来る。

左岸の「ミラドール・デル・エステ公園」内には、コロンブス来島五〇〇周年を記念して一九九二年に完工したコロンブス灯台 (Faro a Colón) の近代建築がある。コロンブスの遺骨が収められた霊廟で



写真2 オマサ要塞とオマサ川



写真1 コロン像とサンタ・マリア・ラ・メルセ大聖堂



写真4 サントドミンゴ東北の郊外ロープウェー



写真3 コロン公園に集う人びと(ソナコロニアル)

あるとともに、博物館としての機能もあわせもち、南北アメリカの各国や日本も含めて世界の常設展示が行なわれている。

一五〇八年にシバオの谷の奥地で金鉱床が発見され、新大陸で最初の金ブームが起こる。砦の周囲にはスペイン人入植者が徐々に増えていき、先住民のタイノ族を使って砂金を採取した。スペイン王室の認めたエンコミンダ制は現地人の使役を認める代わりに、植民者に現地民の保護とキリスト教化を課した。イスパニョーラ島では彼らが持ち込んだ疫病や奴隷的な扱いなどでタイノ族の人口が急減、絶滅に瀕することとなった。

一五二〇年代にメキシコやペルーで金銀が発見されると、スペインはこの島自体への関心が一気に薄れていった。一六世紀末から一八世紀半ばにかけて、イスパニョーラ島自体が新世界のなかで孤立し、貧困と過疎・衰退の時代を迎える。スペインにとって、首都サントドミンゴの維持だけで精一杯で、他の地域での開発はほとんど進展しなかった。

## (二) ハイチ国境へ

サントドミンゴの新旧市街をひととおりまわったあと、午前に一日二便しかない国際直通バスで、陸路ハイチの首都ポルトープランス (Port-au-Prince) にむかった<sup>(1)</sup>。途中、サンクトリストバル、バニを経由し、サントドミンゴの西一〇〇キロに位置するアズア (Azua de Compostela) で小休止する。こ



写真6 ヒマニ入国管理事務所



写真5 エンリキージョ湖

こは先住民のタイノ族によるマゲアナ諸公国の一部で、コロンブスがここに一時的に避難した場所でもあった。二回目の航海に帯同したベラスケスがこの地に入植し、一五〇四年に正式に植民都市となる。メキシコの征服者エルナン・コルテスも一時期この町に住んでいたという。

ここから西は半乾燥のステップ気候となり、ハイチ国境まではサボテン類の多肉・有棘植物が車窓からは目立ってくる。バスはサトウキビを運搬した軽便鉄道の廃線跡をたびたび横断する。砂糖積み出し港として栄え、現在は繊維製品の輸出加工区や海浜リゾートで、コーヒーや野菜産地となっているバラオーナ(Barahona)を臨みながら

標高を下げていく。

そこに突如、エンリキージョ湖の白い風景があらわれ(写真5)、国境の町ヒマニ(tinani)に着く。こはバラオーナからハイチ側のクルデサック(Cul-de-Sac)平野につながる地溝帯で、両側が断層になっている。かつてはこの部分が海峡となっていた。二〇一〇年のハイチ大地震はこの活断層が動いた直下型大地震である。湖面は海拔マインス四五メートルで、カリブ海域の陸地では最も低い。この塩湖南岸は始新世の石灰岩からなり、採掘も行なわれていた。近年、水位の上昇が著しく、湖面面積は拡大の一途をたどり、集落や耕地が水没し大きな生態系の変化がみられる。地球温暖化の影響や森林伐採の影響での保水力の減少とも言われているが、はっきりした原因は不明である。

ここの入国管理事務所ではハイチ入国の手続きを行う。多くの出稼ぎハイチ人の入出国でこたがえていた(写真6)。彼らの所持品の少なさから、一年のうちで何度か国境をまたいで循環的移動(circular migration)を行っているとされる。コロナ感染拡大の影響で検温や問診もあったが、なんとか二時間ほどで通過できた。

### (三) ペシオンヴィルと首都ポルトープランス

ハイチ側にはいると、池というより湖であるソマートル池(Etang Saumâtre)に出る。標高一五メートル、水深三〇メートルのハイチ最大の汽水の構造湖である。ここから南へ回り込むようにしてふたたび丘陵をのぼり、首都ポルトープランス(Port-au-Prince)の市街地をみおろすペシオンヴィル(Pétion-Ville)に到着する。こが国際バスの



写真8 ペシオンヴィルにおけるスラムの拡大



写真7 塀で囲まれたペシオンヴィルの邸宅

終点である。人口三八万人（二〇一五年）で、首都から東十数キロにある富裕層の郊外住宅都市である。

首都を見下ろせる標高一〇〇メートル前後の眺望とすこししやすい気候のペシオンヴィルは、ハイチの政治家・官僚や外交官、実業家、外国人ビジネスマンの高級住宅地となっている。ハイチ版のビバリーヒルズで、高い塀や門扉をもった邸宅（写真7）や外資系オフィス、大使館、高級ホテルもここに集中する。しかし他国の高級住宅地と異なるのは、すぐ近くまでスラムが侵食してきていることである。二〇一〇年のハイチ大地震の折には数万人の人々が、ポルトープランスから避難してきた。ゴルフクラブにアメリカ軍がテン

ト村をつくり、被災者が暮らしていた。その後、多くの人々が首都へ戻らずに、この郊外都市の傾斜地に居住し、スクウォッター集落が拡大していった。そのため、この地区すらも現在は安全が保てないのがハイチの現実である。今年七月七日に暗殺されたモイーズ大統領（Jovenel Moïse）の自宅もここにあり。

首都のポルトープランスは人口一二三万人（二〇一九年）で、市域が平野・海岸部に限られ狭小なため、人口密度は一平方キロメートルあたり三万四二六〇人と異常に高い。都市圏人口では二七五万人（二〇一九）と全人口の三分の一近くが首都周辺に集中しており、その傾向が近年ますます加速されている。ハイチの国民は大多数が貧困状態にあり、いたる所にスラム街が形成されている。ソレイユ（Cité Soleil）市のボストン（Boston）、ブルックリン（Brooklyn）地区、ポルトープランス市のベレル（Bel Air）地区、マルティッサン（Martissant）地区、カルフル・フィユ（Carrefour Feuilles）地区、ラサリーヌ（La saline）地区、カルフル（Carrefour）市など、スラムが市域全体を覆っていると行って過言でない。

二〇一〇年のハイチ大地震のあとの復興もままならない状況で、道路も多くは未舗装で整備が悪い。ライフライン（電気・飲料水）もきわめて不十分である。殺人・強盗・誘拐・婦女暴行等の凶悪犯罪やギャング同士による銃撃戦等の抗争が頻発している。車で市内を通過する際も窓は完全にロックしておく必要がある。震災後の政情不安のために国連ハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）が設立され、二〇一七年にはその後継PKOである国連ハイチ司法支援ミッション（MINJUSTH）となった。それも撤収されて現在は国連ハイチ統合

オフィス (BNUH) が設立されているが、なお、治安や衛生状態はきわめて悪い。

このようにポルトープランスは都市の基本的機能すら満たしていないのに、周辺や農村部からの流入人口によって、さまざまな過密化がコナイブ湾の低地部のみならず、本来は郊外の富裕層の高級住宅地や政府機関、高級ホテルなどが集中している高台のペシオンヴィルまでスプロール化している。とりわけ、本来は谷や急崖で人家が建つべきでない場所まで、地震の被災者家族がバラック家を無秩序に建設しておおるべき垂直的スプロールが進展している (写真8)。

#### (四) 北部の歴史都市カパシアンへ

周囲全体の山々に樹木がないポルトープランス (写真9) から、北部の歴史都市カパシアン (Cap-Haïtien) へ、国道三号線の山側ルートをとって、アンシユ (Hinche) 経由の長距離バスでむかった。国道ですら未舗装部分が多く、整備も不十分で、二〇〇キロメートルに八時間を要した。この山中の車窓はまさにすべて植被がなく、貧困と人口圧の蟻地獄をみる思いであった。乾燥した植生で、粗末な家や旧式のサトウキビ製糖小屋 (写真10) など散見されるが、まともな耕地はきわめて少ない。カパシアンに近づき渓谷に沿って下っていくとやっとな緑の植生やバナナなどの菜園が散見されるようになる。

カパシアンは北県に属するカリブ海に面した港湾・歴史都



写真10 ハイチ山間部のサトウキビ製糖小屋



写真9 ポルトープランス周辺の森林荒廃



写真12 カパシアン市街のゴミ溜化した都市河川



写真11 カパシアンの教会とジンジャーブレッド様式のコロニアル住宅



市である。ポルトープランスが大地震やハリケーン襲来後の復興がままならず、政情も治安もきわめて悪いなか、この都市周辺が国内唯一の観光資源となっている。現人口は二七万人（二〇一五年）にすぎないが、砂糖プランテーション全盛の一八世紀にはこの北部平野が仏領サンドマングの中心で、最大人口を誇った。ライスワイク条約締結後に一七一一年にカプフランセ（Cap-François）として建設された。一七七〇年に首都が島の西海岸のポルトープランスに移されるまで六〇年間、サンドマングの首都であった。「アンティル諸島のバリ」ともいわれるまちなみ・建築や洗練した文化を誇る。一八〇三年には郊外のヴェルティエールの戦いで、デサリーヌら黒人反乱軍が勝利しハイチとして独立すると現名称に改名された。

湿気の多い熱帯気候に適応したバルコニーをもつ、派手な装飾の庇をもつジンジャーブレッド様式の木造建築が市内に散在している（写真11）。しかし公共意識の欠如、インフラ、ライフラインの未整備はこの都市においてもはなはだしく、写真12のようなゴミ溜化した河川や、市街地に近い美しいはずのビーチ<sup>12</sup>ですら、ゴミ、廃棄ペットボトル、ビニール袋の山で、マリンスポーツがとでもできる環境ではない。これには正直驚いた。歴史的な市街地は三本の幹線道路に沿って分布するが、破損が著しく、多くの市民の雑踏で混沌としている。

#### （五）ラミエール国立歴史公園から再びドミニカ共和国へ

カパシアンの東南二七キロメートルの山際、海拔一〇〇メートルの地に、ハイチ独立の黒人指導者で奴隷として生まれたアンリ・クリストフ（Henry Christophe）が建設したのハイチ国の首都ミロ（Milot）

がある。現在は人口二万人あまりの郡の小さなコミュニティ（町）にすぎない。ここがハイチ唯一の世界遺産（一八八二年登録）のシタデルとサンスーシ城があるラミエール国立歴史公園の基地である。ヴェルサイユ宮殿を模したパロック様式のサンスーシ城（写真13）を一八〇七〜一三三一年にかけて建設し居城とした。一八四二年の地震で破壊された部分もあるが、内装も高級木材や大理石などを使った豪華なもので、フランスやイタリアから取り寄せられた建材や装飾品が用いられたという。ここにしっかりと歴史博物館を建設すれば、ハイチ独立とその後の苦悩の歴史を実感する場として格好の史跡地域となる。

そのさらに南、標高九七〇メートルのラファリエール山



写真 14 シタデル・ラファリエール



写真 13 サンスーシ城

頂には石積の巨大な要塞がある(写真14)。シタデル・ラフアリエールは一八〇五年から一八一七年にかけて、クリストフ、のちのハイチ国王アンリ一世によって建造された。独立まもないハイチを再び支配下に置こうとする旧宗主国フランスの軍隊の侵攻を想定したものである。しかし、黒人であるクリストフ自身はフランス文化や権威への憧れが異常に強く、ナポレオンに倣って皇帝となり首都をカバシアンに移し(一八一一年)、カプアンリと改名している(一八二〇年まで)。

周辺が歴史公園となっているが、良好な宿泊施設などはほとんどなく、カバシアンからのタクシーが唯一の足となっている。しかもサンスーシ城からシタデルへの行程は数キロある。歴史公園内ということでは車が通行できず、バイクと徒歩あるいは馬を利用するしかない。しかしその不便さを補って余り有る壮大な建築群である。晴れたときにはカバシアンからもその砦が遠望できる。

一方で、カバシアンで栄華をほこったフランス人プランターや商人、職人、さらには有色自由人(奴隷身分から解放された黒人やムラート)は、黒人奴隷階層の報復を恐れて、キューバ、ジャマイカ、アメリカ合衆国のルイジアナ州などに逃れた。ミシシッピ川河口の港湾都市ニューオリンズがその入口となった。二つの都市はジンジャーブレッドハウス様式でも共通している。

また、カバシアンはドミニカ共和国サンチアゴやサントドミンゴへの国際直通バスの起終点でもある。午前の二便しかないが、道路状況はドミニカ共和国第二の都市サンチアゴを経由し、山岳区間が少ないため、三七〇キロメートルの距離があるが、約八時間で到着できた。そのドミニカ側の国境の町がダハボンで、ここには両国の共同市場が

ある。北部の肥沃な平野や丘陵地を走り車窓には水田も散見された。

### 三 ドミニカ共和国とハイチの基本指標と主要産業

本章では統計資料(表1)で両国を比較する。島全体の面積は北海道や樺太とほぼ同じであるが、東側三分の二がドミニカ共和国、三分の一がハイチである。島の北を北緯二〇度線が通過し、東から恒常的に吹く貿易風が湿った空気を運ぶ海洋性の気候である。ケツペンの気候区分ではサバナ気候(Aw)で、ドミニカ共和国の北の一部は熱帯雨林気候(Af)となっている。二〇〇〇〜三〇〇〇メートル級の山が連なる北部、中央の脊梁山脈は降水量も多い。この脊梁山脈の東側は降水量が二〇〇ミリを超えるところもあるが、風下にあたる西側は乾燥し、もともと植生も乏しい。しかも燃料の薪炭材採取や焼き畑による開発によって森林がほとんど伐採され、ハイチ側の森林面積はきわめてわずかである。それが表1でドミニカの森林面積率が四一パーセントであるのに対して、ハイチは三・五パーセントとい極端に低い数値としてあらわれている。ドミニカの山間部では夏は快適だが、冬は暖房が必要な場合もあるほど冷え込むこともある。

人口はハイチ一〇七三万人(二〇一九年、世銀)、ドミニカ共和国一一二六万人(二〇一九年、世銀)、島全体で二一九九万人という稠密な人口を抱える。一平方キロメートルあたりのハイチの人口密度は三三八人で、日本の人口密度三三六人(二〇一六年)よりも高く、カリブ海域の独立国のなかでもバルバドスについて人口密度が高い。キューバが人口一一三三万(二〇一九年)、人口密度一〇二人(二〇一

表1 ドミニカ共和国とハイチの基本指標の比較

指 標	ドミニカ共和国	ハイチ
人口(万人) 2019年	1,126	1,073
面積(万 km <sup>2</sup> ) 2019年	4.9	2.8
人口密度(km <sup>2</sup> /人) 2019年	230	383
産業別人口比率(%) ドミニカ：2016年、ハイチ：2003年	第1次 9.3 第2次 17.6 第3次 73.1	第1次 50.4 第2次 10.4 第3次 39.2
非識字率(%) 2015年 男/女	8.8/7.7	35.7/42.7
老年人口率 65歳以上(%) 2015年	6.5	4.6
乳幼児死亡率(%) 2015年	28.1	63.6
清潔な水を利用している人口の比率(%)	85.0	58.0
清潔なトイレを利用できる人口比率(%)	84.0	28.0
人間開発指数	0.76	0.51
国土に占める森林割合(%) 2015年	41.0	3.5
1人当たり国民総所得(USドル) 2019年	8,282	780
穀物自給率(%) 2013年	30	52
エネルギー自給率(%) 2015年	12	70
貿易総額(百万ドル) ドミニカ：2020年(ドミニカ税関総局) ハイチ：2018年(WTO, 物品のみ)	輸出 9,853 輸入 17,278	輸出 1,078 輸入 4,820
外貨準備高(百万ドル)(2020年7月：中銀)	6,689	237
対外公的債務(億ドル)(2017年：外務省)	298	22
世界銀行分類	高中所得国	後発発展途上国
DAC 分類	高中所得国	低所得国
都市人口比率(%) (世界国勢図会)	1980年 51.3 2000年 61.8 2020年 82.5	1980年 20.5 2000年 35.6 2020年 57.1
首都と首都人口(人)、首都の人口密度(人/km <sup>2</sup> )、 都市圏人口(人) ドミニカ：2020年、ハイチ：2019年	サントドミンゴ 1,049,567 10,049 4,210,121	ポルトープランス 1,234,742 34,260 2,754,812

(資料) 世界銀行, ILO, 世界国勢図会 2020/21, 山岡(2018) ほかにより作成。飲料水・トイレのデータは2015年。首都や都市圏の人口は、スペイン、フランス語のウィキペディアによる。

※ハイチのエネルギー自給率の高さは、薪炭燃料利用が農村部で中心となっているためである。

六年)に比べると、この島の人口密度がいかに高いかわかる。

産業別人口比率でも、ハイチは第一次産業人口比率が五〇パーセントと中南米諸国で最も高い。それは都市人口の比率の低さの裏返しでもある。一九八〇年のハイチが二〇・五、ドミニカ共和国が五一・三パーセントであった。両国とも都市部への人口集中が著しいが、それがとりわけ顕著になってきたのは二一世紀以降である。

両国とも主食は南アメリカに起源するキャッサバなどの芋類と調理用バナナ(プランティン)をよく食べるが、いちばんの主食は米である。インデिकाの長粒米で、様々な豆類を煮てその汁といっしょに炊き込んだ色のついたごはんが一般的である。旅行中に水田も平地では見ることができたが、現在のハイチは農業国といっても日常の食料もこと欠く状態で、アメリカ合衆国から米を大量に輸入している国もハイチである。<sup>15</sup> コーヒーが南部のジャクメルの山地で栽培されているのが主要農産物といえるぐらいで、かつて世界一を誇った砂糖生産の面影はまったくない。サトウキビ栽培は零細農民の粗放的・個別的形態で行なわれているにすぎない(写真10参照)。

ドミニカ共和国の砂糖生産のピークは二〇世紀以降である。米国資本による大規模プランテーションが三〇も一気に建設され、当初はキューバからの移民労働力、のちに小アンティル諸島各地からの季節労働者やハイチからの移民によって補われた(狐崎知己 二〇一八 三五頁)。

ハイチはかつては砂糖が重要な輸出作物であったが、現在では価格の低迷によってまったく振るわない。そのため耕地も他の食用作物に代わってきている。いずれも小規模・零細農家が多く、モロコシやト

ウモロコシの自給用作物が小規模に栽培されているが、食糧自給率は五割にも満たない。毎年襲来するハリケーンや雨季の降水によって土砂崩れや水害が頻発し、しかもその復興にきわめて時間がかかる脆弱な環境にある。とりわけ二〇一六年一〇月のハリケーン・マシューはハイチ経済に大打撃を与え、約二〇億ドル、GDPの五分の一相当の損失がでた。農業セクターでも五億八千万ドル相当の被害を受け、同国の収穫物の九割が被害を受けた。

両国の経済を支える大きな資金が移民による本国の家族等への送金である。ドミニカ共和国は約五割がアメリカ合衆国だが、ハイチでは、米国、カナダ、フランス、チリや隣国ドミニカ共和国が多い。二〇一七年の推定送金額は二七億七二百万ドルと、じつにハイチのGDPの約三分の一(約三四パーセント)にのぼっている。<sup>16</sup> マイアミやニューヨークには大きなハイチ人やドミニカ人のコミュニティがある。ドミニカ共和国の一人当たりの国民総所得は八二八二ドルで、高中所得国に分類されているものの、所得格差は大きく地方の貧困は深刻である。ハイチにいたっては七八〇ドルと西半球諸国の最低水準である。

現在のドミニカ的主要産業はニッケル、アルミニウムなどの鉱業、繊維加工・医療用品製造などの軽工業と農業である。第三次産業人口は七三パーセントを占め、観光業とコールセンターなどのサービス業に特色をもつ。観光はアメリカ合衆国やヨーロッパ、中南米からの格安直行便がプンタカーナ、ラ・ロマーナ、北部のプエルタプラタなどのリゾート地に直接乗り入れている。クルーズ船も数多くあり、プライベートビーチをもった高級海岸リゾートから大衆的なオールインク

ルーシブホテルも盛況で、大きな外貨獲得源となつてゐる。

ハイチの経済はドミニカ共和国よりも格段に低い。コーヒーの輸出を除いて、農業も、工業もほとんど機能していない。最も大きな財源がアメリカ合衆国をはじめ国や国際機関からの物資・財政援助と、自国を出て働くハイチ出身者の送金である。下層・貧困層は多くのがドミニカ共和国への移住や出稼ぎで、サトウキビや野菜などの農作業、建設労働、ホテルでの就業などに従事している。

さらにハイチの国際移動の特色は、支配者の圧政や不合理な搾取、統治の機能不全に陥り、エリート層、知識人層がアメリカをはじめカナダなど北米へ多数移住していることである。そのため、自国の優秀な人材資源の不足がはなはだしい。アフリカ系黒人が全人口の九五パーセントを占めるが、その上で旧宗主国のフランスなど海外で教育をうけ、国内の政府系企業の実権を握っているのが、白人と黒人の混血であるムラートと、二〇世紀になつて母国を追われたユダヤ人やシリア・レバノン人である。富の再配分でもきわめて不平等である。

#### 四 激動の歴史と苦悩のなかで―植民地から国民国家へ

サントドミンゴ (Santo Domingo) は、スペインがかつてイスパニョーラ島全土を支配し時期の植民地の名称だが、その後、フランスが西側の三分の一を占めたあとは、東側三分の二をスペインが支配した領域の名称でもある。一方、サントドミンゴ (Saint-Domingue) は、一六五九年から一八〇四年までの間、カリブ海のイスパニョーラ島の西側の三分の一を占めていたフランス植民地の名称である。砂糖とコー

ヒー輸出で、フランス植民地の中でも最も利益を上げていた。

この二つの領域の支配関係・地政学はすこぶる複雑である。自然環境とからめて概観しておこう。平地としては、ドミニカの中央山脈と北の海岸山脈の間にはシバオ平原が開けて、第二の都市サンチアゴや第四位のラベガ (La Vega) が位置する。山脈周辺には丘陵地が発達し、東部は低平な草原となつてゐる。

ハイチではドミニカの南部から連続する南部山脈の標高が高く、ラセル山 (Pic de la Selle) がハイチの最高峰 (二六八〇m) となつてゐる。シエラ・デ・ネイバ (Sierra de Neiba) は中央山脈の南、ドミニカ共和国の南西から北西方向に伸びて、ハイチ中部のゴナイブ湾に続く山脈である。この間の低地がクルドサクク平野で、南北を断層によつて区切られた構造谷となつてゐる。その西端にハイチの首都ポルトープランスがある。

しかも島の西側の海岸線は出入りが多く、イギリスやフランスの海賊 (バッカニア) の格好の隠れ場所・拠点となつた。そのひとつがイスパニョーラ島西北の離島トルトゥーガ島 (スペイン語: Isla Tortuga、フランス語トルテュ島 (Ile de la Tortue) である。コロンブスが最初にここに上陸している。一六三〇年以降、トルトゥーガ島はフランスとイギリスの植民地に分割され、そこにオランダ人海賊も入り交じつて無法地帯<sup>17)</sup> となつた。スペインは何度か奪還を試みるが、しだいにイスパニョーラ島西半分の支配を放棄するようになっていった。ただ、海賊の勢力は、一六八〇年のイングリッド法で外国船に対しての海賊行為が禁じられたため衰退していく。一六八四年のレーゲンスブルクでフランスとスペインが和約を結び、九七年にはライスワイク

条約でサンドマングの領有権はフランスに移された。島嶼のさらにその離島としてのトルトゥーガ島は、互恵的、有機的、脱領域ネットワークの典型といえよう（佐藤幸男 二〇二〇、四七頁）。

一六九七年にはライスワイク平和条約によってイスパニョーラ島の西側がフランス領となる。その後、一七九五年には仏西戦争の結果、全島がフランス領となる。その低地にはサトウキビが作付けられ、当時としては世界最大の砂糖プランテーションの植民地となった。

一八世紀はカリブ海域諸島がアフリカからの奴隷労働力をもちいた砂糖生産の全盛期である。ブラジルから逃れたオランダ人によって新しい大規模製糖技術がまずイギリス領のバルバドス（一六四〇〜一六九〇年）、ついでジャマイカ（一六九〇〜一七二〇年）に拡散した（アラン・テイラー 二〇二〇、一〇九〜一一六頁）。その成功をみたフランス領では、サンドマングをはじめ、マルティニーク、グアダループ、フランス領ギアナで砂糖プランテーションを開始する。一七八三年の時点で、サンドマングには七八三の製糖工場、三一七のコーヒー・プランテーション、三二五〇のインデイゴ・プランテーション、一八二のラム酒蒸留所が稼働していた（山岡加奈子編 二〇一八 一八頁、狐崎知己）

一七九一年八月一日、その中心であったカパシアン近郊の「カイマンの森」に黒人奴隷の指揮官たちが集まって、白人農園主に対して反乱を誓い合った。<sup>18</sup>砂糖に関するすべての施設を破壊し、畑に火をつけて、徹底した革命をめざした。その黒人指揮者がトゥーサン・ルヴェルチュール（Toussaint Louverture）であった。折しもフランス本国ではフランス革命による人権宣言や王政が廃止され、ルイ一六世の処

刑で共和制が成立したが、新大陸で最初の共和制をうちたてたのがハイチであった（一八〇四年）。

しかし、フランスでは革命のあとにナポレオンによる第一帝政が一七九九年に成立する。ナポレオンは兵をハイチに送り込んだ。ハイチ革命の影響がジャマイカなど周辺の植民地に波及をすることを恐れるイギリスも加勢した。建国の父、デサリーヌはナポレオンに倣って皇帝として即位し、ハイチ帝国が成立する。黒人国家ハイチが再び奴隷制に戻ることへの脅威から、残った白人を処刑し、白人が資産や土地を所有することを禁じた。この「ハイチ脅威論」は、フランス人農園主のジャマイカ、キューバ、ルイジアナなどへの逃亡を促し、自国の経済を後退させた。独立戦争の結果、ハイチの人口は一五万人も失われて、三八万人に落ち込んだ。しかも男女比は三対一といういびつな人口構造をひきずることになった。旧宗主国への農産品の輸出の道も閉ざされ、プランテーション自体も、自由を得た黒人には、賃労働という形ですら実現が困難となった。「ゲームのルールもブレイヤーも欠落した状態」（山岡加奈子編 二〇一八 一二二頁、狐崎知己）での国土再建であった。

いち早く独立を誓ったアメリカ合衆国も、南部のプランテーションを維持するための奴隷制度の廃止には反対の態度をとる。このような四面楚歌のなかでのハイチの独立は、解放奴隷による平等な土地の分配、自作農化は、高度な農工一体型の大規模砂糖生産システムをも壊滅させ、独立国家としての世界の国々からの承認も遅れた。フランスは一八二五年、アメリカ合衆国にいたってはリンカーンが奴隷解放宣言をする一八六二年までハイチの承認は持ち越された。さらに多額の

賠償金をフランスがハイチに要求したため、その負債返還を理由に、一時期、ハイチはアメリカの保護下にはいった。

アメリカ合衆国では、白人の資産家は独立戦争により自由の感覚を得たが、アフリカ系黒人は奴隷のままだった。イギリスでは、奴隷制度廃止論者が彼らのために立ち上がったが、王侯貴族がいまだに支配していた。フランスでは、革命を起こした人々は自国の貴族に刃向かったが、植民地の砂糖諸島にいるアフリカ系黒人をどのように扱うかについては決めかねていた。「革命時代」は所有権に対抗して自由の概念を押し進めたが、それらの大きな衝突の先に何があるかは誰にもよくわからなかった。(マーク・アロンソン、マリナ・ブドーズ 二〇一七、一一一―一二二頁)

アメリカの著名な進化生物学者・生物地理学者のダイアモンドは、『銃・病原菌・鉄』(一九九七)で人

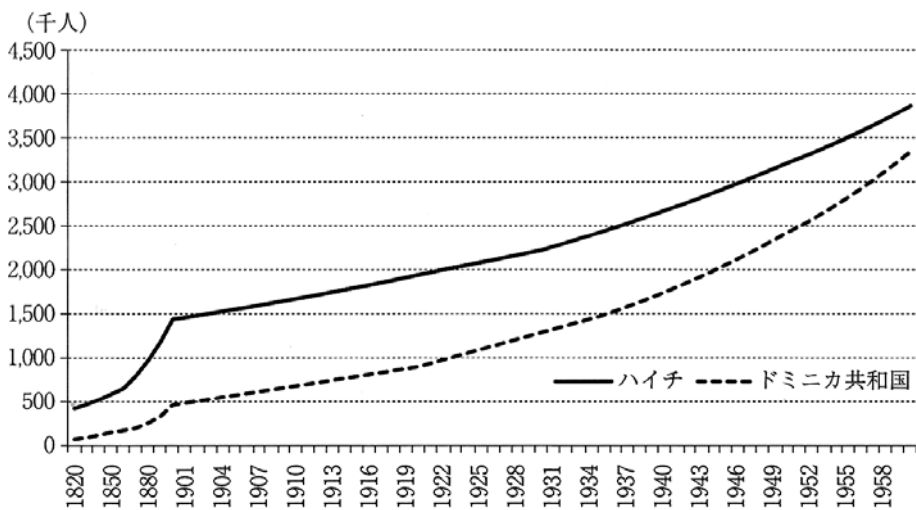


図2 ドミニカ共和国とハイチの人口推移 (1820~1960年)  
(山岡加奈子編 2018: 29、原図は Bulmer Thgmas 2012 より狐崎作成)

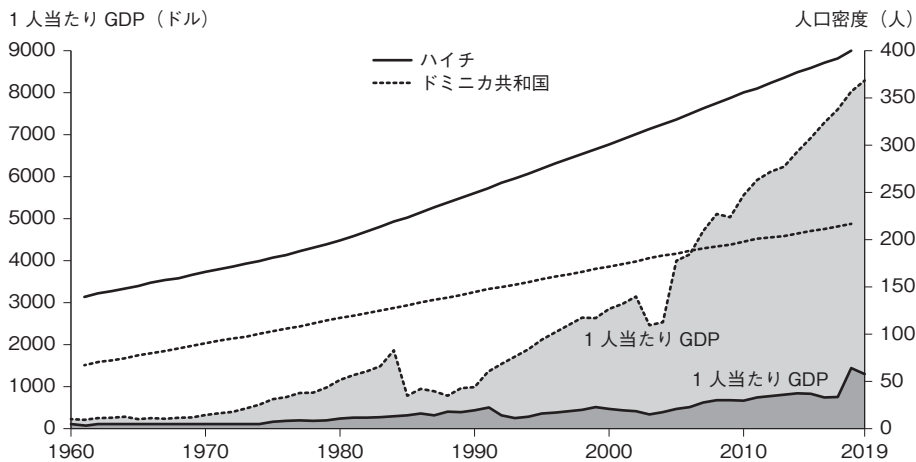


図3 ドミニカ共和国とハイチの人口密度と1人あたりGDPの推移 (1960~2010年)  
(World Bank 資料より筆者作成)

類史・文明の発展を環境の初期条件の差違から論じたあと、次著『文明崩壊』（二〇〇五）では、過去・現在の世界の文明・社会衰退のメカニズムを環境の違いだけでは論じられない例として、ハイチとドミニカ共和国というひとつの島のなかでのとてもない発展の落差としてとらえている。ダイヤモンドはその結論として「ドミニカの環境はハイチの環境とつながって一体となっていること、そしてハイチはドミニカ共和国に最大の影響を及ぼす国であると言うことだ。」（ダイヤモンド 二〇〇五 一二六頁）として、左のように述べている。

ドミニカ共和国がハイチの将来に建設的な役割を果たす可能性はあるだろうか。一見したところ共和国がハイチの問題解決の拠りどころとなる見込みはほとんどなさそうだ。共和国は貧しく国民の福利にもあり余る問題をかかえている。ふたつの国は、異なる言語や異なる自己像を含む文化的な障壁で分断されている。両国の間には長く根深い対立の伝統があり、多くのドミニカ人はハイチをアフリカの一部とみなしてハイチ人を軽蔑する一方、多くのハイチ人は外国からの干渉に猜疑心を抱く。ハイチ人とドミニカ人は、それぞれ自国が相手から受けた残虐行為の歴史を忘れることができなない。ドミニカ人は十九世紀のハイチによるドミニカの侵略と、二十二年間の占領を憶えている——占領の肯定的な側面、例えば奴隷制の廃止などについては忘れていない。ハイチは、トルヒーヨがただ一度にして最悪の暴虐を尽くし、一九三七年十月二日から十月八日のあいだに、ドミニカ共和国北西部にシバオの各地に住む二万人のハイチ人をすべて（マチユータ 鈍）で虐殺するように

命じたことを憶えている。今日でも、両政府のあいだに協調はほとんどなく、警戒心、あるいは敵対心を持って互いを見る傾向が強い（ダイヤモンド 二〇〇五 一二六頁）。

人口や人口密度、一人あたりのGDPの推移から両国の径路がいくつか分岐したのかを検討するため、図2と図3を用意した。初期条件として、一八二〇年には両国とも五〇万人にも満たない人口希少国であった。一九六〇年にはドミニカ三二九万人、ハイチ三八二万人とハイチが若干人口が多いがほぼ拮抗していた。ただ、一九七四〜二〇〇〇年にはドミニカ共和国の人口がハイチを上回る<sup>(9)</sup>。

図3をみると、一九八〇年以降、ハイチの人口密度の増加が顕著となっていることがわかる。一方、経済発展の指標となる一人あたりのGDPでは、ドミニカは二回の減少期をはさむが、順調な上昇カーブを描く。とくに二〇〇五年以降の急上昇は注目に値する。一方、ハイチは二〇一八年にようやく一〇〇〇ドルを超えたという超低成長を継続してきた。

## 五 ボーダーランドの環境地政学

スペイン領のサントドミンゴには、フランス領サントマングのように砂糖やコーヒーの輸出によって経済的繁栄を謳歌することなく、放牧と穀物・野菜などを中心とした自給的な農業が長く続いた。一八一四年にドミニカ共和国として独立しても、ハイチからの侵略で併合（一八二一〜四二年）、一八六一〜六四年のスペインへの併合、さらに



はアメリカ合衆国の軍事占領・統治（一九一六～一九二四年）とめまぐるしく統治国は変化する。それだけ国民国家としての意識が希薄なことの証左でもあった。

そのボーグーランド (borderland) で起こったひとつの悲劇を取り上げてみたい。日本の海外移民としてのドミニカ移民である。一八六八（慶応四・明治元）年のハワイ移民にはじまる近代日本の移民史のなかで、ドミニカ移民はかなり特殊である。一九五六～五九年まで三次にわたる募集で、二四九家族、一三一九人が移住した戦後の国策移民であることをまず指摘しておきたい。そのうち、一三三家族が集団帰国し、七〇家族が南米などへ再移住している（今野俊彦・高橋幸春 一九九三 二七ページ）。杜撰な計画が国会でも何度も議論され、日本弁護士連合会人権擁護委員会への人権侵害の申し立て、現地調査団派遣を経て、二〇〇〇年七月に現地残留者を中心とした二二六名が、日本政府を相手取って約二五億円の国家損害賠償を求め提訴した。裁判では国（外務省及び農林水産省）の法的責任を全面的に認められたが、賠償は棄却され、和解金が支払われた。

この移民事業を推進した日本側の背景には、アジア・太平洋戦争後の引揚者による食糧不足、国内の農地不足がある。当時のドミニカ共和国の独裁者トルヒージョ大統領が、ハイチ国境でのハイチ人の不法侵入に手を焼いていた。その地域の防衛目的での国营コロノ（農場）建設を行っており、その入植者として、スペインにつづいて日本を考えていたこともある。また彼自身が大の親日家であることも交渉がスムーズに進んだ要因でもある。

その入植地は次の八箇所である。マンサニージョ、ダハボン、ハラ

バゴア、コンスタンサ、ネイバ、ドゥベルへ、アルタグラシア、アグアネグラ（図1参照）。そのうちなんとか定着したのが北西部で、現在もハイチとの陸路での入り口となっている北部のダハボン、中央山脈麓の高冷なハラバゴア、コンスタンサの二開拓地である。前者では少ない用水を利用しての米栽培、後二者は野菜栽培が主である。ただし、いずれも都市の消費市場規模が小さく、作った作物すら販売に苦労した。また、アンサニージョは漁業移民であった。

ネイバ、ドゥベルへはエンリキョ湖の沿岸にある塩を含む白い土地（写真6参照）で、ともに農作物も作付けられない「平坦地の生き地獄」と表現している（今野俊彦・高橋幸春編 一九九三 四二頁）。

アルタグラシア、アグアネグラは山岳地のコーヒー栽培地である。配分地は石だらけの不毛の土地で、「ドミニカ政府は、日本人移民をハイチ国境地帯に入植させ、いわば国境紛争の防波堤」にしようと考えた（同右 四五頁）。三〇〇タレア（一八ヘクタール）の無償譲渡という好条件につられて多くの募集者のなかから入植者が選ばれた。しかし、国营入植地（コロニア）には移民に所有権はなかった。土地無し農民、貧農救済を名目に、ボーグーランドの未開拓地の「ドミニカ化」をめざしたものであった。スペイン、ハンガリー農民の入植に失敗するのに外国人を盾にした国境警備をするため、管理者は耕作物、農業生産活動を指定する、つまり自由に農民が作付けできない土地であった。

ダイアモンドは『文明崩壊』のなかで、ドミニカ共和国とハイチがなぜこれほどまでにひとつの島で違いを生み出した要因を次の四点に

まとめている(ダイヤモンド 二〇〇五—二〇一四)。<sup>①</sup>イスパニョーラ島の分水嶺はドミニカ側にあり、広い肥沃な平野や谷はドミニカ側で、風下もあたるハイチ側は乾燥してもともと植物の生育はドミニカ側よりも劣る。<sup>②</sup>ハイチがフランスの重要植民地として黒人奴隷を労働力とした集約的プランテーションであるのに対して、ドミニカ側が集約化の意欲もないままに放置された。そのため人口では七倍の差があった(図2参照)。面積ではハイチがドミニカの半分であるため、単純な人口密度でもハイチはドミニカの二倍あった。<sup>③</sup>両国の独立後もドミニカには中産階級(ユダヤ人、レバノン人、パレスチナ人、キューバ人、ドイツ人、イタリア人、スペイン人)の投資家、専門職が移住してきた。大土地所有制度を温存し、バナナ、さとうきび、タバコ、コーヒーなどの換金作物の開発が進んだ。一方、ハイチは革命で自作農化、相続による土地の細分化によって「貧困の共有」という悪循環にはいつていき、海外からの援助も得られなかったことが大きい。

さらにダイヤモンドは、近年格差を生みだした独裁者の系譜、トルヒージョからバラゲールと、デヴァリエ父子の違いにも注目する(④)。いずれも隣国人、反対勢力を大量虐殺したが、環境問題を重視して、森林保護のために国立公園設定や不法森林伐採の禁止を徹底したドルヒージョ、バラゲールに対して(川名秀行 二〇一〇)、ハイチのデヴァリエは一族への蓄財にのみ腐心した違いを強調する。デヴァリエは医師ではあったが、アフリカ伝来のブドゥー教を崇拝し、過度に黒人文化を礼賛した。ただし、両国とも独裁期がいちばん政権の安定していた時期であったことは運命のいたずらである。それ以外

の時期はめまぐるしく大統領が入れ替わり、アメリカ合衆国の保護国化、覇権がすすんだことまで両国は類似する。

アメリカとメキシコの国境地域の歴史研究者であるマルチネス(一九九四)は、ポグダーランド<sup>(20)</sup>を国家間の境界線によって二分された地域として理解し、それを境界における相互作用や相互交流の強弱によって、安定度の低いものから高い順に次の四類型を提起している。(一)疎外型ポグダーランド、(二)共存型ポグダーランド、(三)相互依存型ポグダーランド、(四)統合型ポグダーランド。

ドミニカ共和国とハイチの場合は、出稼ぎ者の循環的移動はみられるものの、現在では紛争や政治対立のために、国境を越えた人や文化、技術の交流はほとんどない(一)の類型といえよう。歴史的には、国境を越えた交流が限定的な交流が、対立や負の感情をもつものの交流を完全に妨げるほどではない(二)の性格も帯びた時期もあったが、両国の経済格差が広がるにつれて、より両国の国際関係が閉塞的になってきていることは否めない。<sup>(21)</sup>

## 六 おわりに―共通基盤としてのスペイン・タイノ

ここまでこのレポートでは二国の現在と過去の差違ばかりを強調してきた。しかしもともと両国は、コロンブスによって初めて公式にヨーロッパから白人が入植し、スペイン文化や慣習、制度を根付かせた歴史をもつ。その一体感や、他のカリブ海域、とりわけジャマイカやキューバ、小アイティル諸島、バルバドス島などと異なる何かがある、在外研究時から思い続けてきた。まだその本質は見えないが、い

ま考えていることを以下に記してみた。

カリブ海域の先住民はアラワク族とかタイノ族、カリブ族といわれ、南米大陸、アマゾン、オリノコ川流域から小アンティル諸島、さらには大アンティル諸島と島々を飛石つたいに北上していった。アメリカ考古学・先史学の大御所アーヴィング・クラウスはその下位区分として、タイノ人（キューバ島中西部、バハマ諸島、ジャマイカ島、イスパニョーラ島、プエルトリコ島など）、アイランドカリブ人（小アンティル諸島）に三分し、さらにその核心をクラッシク・タイノ人としてイスパニョーラ島、プエルトリコ島の重要性を指摘している。

好戦的なカリブ人<sup>(22)</sup>（族）が食人種という言葉は、スペイン人のみならず、タイノ人も他者表象としてそれに与している（アーヴィング・クラウス 二〇〇四 三―三八頁）。クラウスは、コロンブスの「発見」から二〇年ほどのあいだに入植スペイン人によって金鉱採掘の使役や疫病によって絶滅したとされる通説の背後にあるスペイン人の残酷性やエンコミエンダ制に帰するよりも、「状況の産物」であったという見解をとる（クラウス 二〇〇四 二二―二七二頁）。タイノ人がキヤツサバ（現地名ユカ）、タバコ、マメ、サツマイモ、カボチャ、グアバ、パイナップルなどを南米から招来し、東半球熱帯の諸民族との食料交換に寄与した点なども重視する（クロスビー 二〇一七）。「コロンブスの交換」にタイノ人が果たした役割という中間項をささむことで、食料資源の多様化に注目する。

カリブ海域で入植したスペイン人男性が先住民であるタイノ女性と容易に結婚して混血化がすすんでいることは当地域のイギリス人、フ

ランス人と大きく異なる。国勢が衰えたといえどもスペインが長らく支配したキューバ島、イスパニョーラ島、プエルトリコ島では現地人黒人系の人々とのムラートの人口比率が他の島嶼よりは高いことは重要である。

今回のイスパニョーラ島周回で得たささやかな発想は、砂糖生産地は雨季と乾季がはっきりした平地での黒人奴隷を用いた大規模プランテーションにはほぼ限定されるのに対して、小規模自作農によるコーヒー栽培や自給野菜、穀物、いも類はむしろ傾斜地、山間地が主要な舞台であることだ。これが山間部への人口増加、開拓集落の新設、森林伐採、燃料・炊事用の薪炭採取による植生破壊を加速した誘因であるという視点である。

イスパニョーラ島はコロンブスが新大陸で最初にサトウキビ苗をカナリア諸島から持ち込んだ島ではあるが、その後は砂糖産地としての永続的な繁栄はなかった。ひとえにスペイン人のプランテーション経営の意欲の低下と、その裏返しであるメキシコやペルーなどでの金銀採掘の魅力に帰せられる。

一方、カリブ海域のイギリス植民地であるバルバドスでは一七世紀に砂糖産地となる。ジャマイカでは主産地化が一八世紀で、サンドマングにおける主産地化は一八世紀後半におとずれる。それに対し、キューバやドミニカ共和国での砂糖主産地化は一九世紀以降である。その背景にはアメリカ産業資本の介入がある。そこに人口過大なハイチやプエルトリコなどの周辺島嶼から労働力が投入されて、集約的な砂糖産地が最後発地として成立した。

アラブ人などによって地中海沿岸やカナリア諸島でのサトウキビ栽

培を早くから経験してきたスペイン人に対して、その経験がないフランス人、オランダ人、イギリス人は、その技術をすべてセット・パッケージで移植した。大規模化、製糖工程のエネルギーの動力化などを達成した工業を背景とした経営者の気質がその背景にある。その一方で、機械に代替できない労働力はすべて外来者―最初はアフリカからの黒人奴隷、奴隷制度廃止後はアジアからの契約移民―に依存したのである。それは、タイノをはじめとする先住民をナシヨナリズムの要素として尊重するドミニカ共和国、黒人ルーツを重要視するハイチのナシヨナリズム表象の違いにも現れている。その文化的DNAにはスペイン支配の共通基盤があるのとはいう思いはいまも私の脳裏から消えない。

#### 〔付記〕

本研究は二〇一六～一九年度日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「カリブ海域「砂糖植民地」の系譜と産業遺産の比較技術史」（一六K一二八〇三、研究代表者 野間晴雄）の成果である。また本研究は、二〇一三年度関西大学在外研究（海外学術研究）の成果でもある。現地調査の機会を与えていただいた二機関に謝意を表したい。これらの現地への旅行に關しては、日本での少ない情報のなかで、筆者の複雑なチケットを首尾よく手配いただいたアカデミートラベル（大阪市淀川区十三東）の松田廣滋、戸田安彦氏にお礼を申し述べたい。なお、小稿に挿入した写真はすべて筆者が二〇二〇年三月に現地で撮影したものである。

#### 注

(1) 同じカリブ海域には、小アンティル諸島中のウインドワード（風上）諸島最北に位置する火山島のドミニカ国（面積は奄美大島とほぼ同じ七五〇平方キロメートル、人口七・一万人、二〇一八年世界銀行

統計、以下、世銀とする）がある。一四九三年のコロンブスの第二次航海で「発見」され、一六三二年にフランス人が入植したが、その後イギリスが占領し、一八〇五年以降イギリス領となる。一七八七年に独立するが、イギリス連邦の加盟国で、先住のカリブ人が残存する。両者を区別する場合はドミニカ共和国と記すが、以下、本稿ではドミニカと記した場合でもすべてドミニカ共和国をさすこととする。

(2) 海洋島／洋島 (oceanic island) とは大陸棚の外にある大洋底からそりたっている島である。その成因は、火山島がサンゴ礁島である。陸島／大陸島の対語。

(3) ドイツ南西部のプファルツ地域の継承が原因でおこったプファルツ戦争で、ルイ一四世のフランスがアウクスブルク同盟（ドイツ諸侯・皇帝、オランダ、スペインなど）とフランスとの間で締結した講和条約。この条約によって、フランスはストラスブルとサンドマング（現在のハイチ）を獲得し、南インドのボンデイシエリとカナダのノヴァスコシアを回復した。一方、スペインはフランスに占領されたカタルーニャとルクセンブルクなどの地域を回復したが、イスパニョーラ島では領地を東側に限定された。東側を一四九二年から一八四四年のドミニカ共和国独立までの三五二年間のうち、スペインが支配したのは三〇三年と圧倒的に長い。

(4) Dominican Republic-Haiti order, 英語版ウィキペディア [https://en.wikipedia.org/wiki/Dominican\\_Republic%E2%80%93Haiti\\_border](https://en.wikipedia.org/wiki/Dominican_Republic%E2%80%93Haiti_border) (二〇二二年七月一〇日閲覧)。アメリカ政府は一九六〇年頃における、両国の一九二九年確定の境界の問題点として、分水嶺がドミニカ側あり、ハイチ側に流れる東西方向の川の水源がドミニカにあること、季節労働者がハイチからドミニカ側に毎年来往すること、両国間の貿易量が少ないことをあげている (US Department of State 1961)。

(5) 二〇二〇年三月五日～一五日の十一日間で、伊丹から成田、ニューヨーク（ニューアーク空港）経由でドミニカのサントドミンゴを往復した。

(6)

ハイチ人のドミニカ共和国への移住は一九世紀に遡り、サトウキビ農場の契約季節労働者（スペイン語でブラセロ、主として収穫労働）に始まる。農村地域にバテイと呼ばれる農業集落が三〇〇ほど形成された。そこにルーツをもつ黒人、ムラートの二世・三世からは、多くのアメリカプロ野球界でのスターが生まれている。地元産業の衰退と首都のサントドミンゴに出てきても安定した職に就けない若者にとつて、メジャーリーグは夢を抱ける世界である（国本伊代編二〇一三 一六六一―一七三頁）。『広島東洋カープアカデミーオブベースボール』は、ドミニカ共和国の東南部のサンペドロ・デ・マコリス郊外に一九九〇年に設立された外国人選手発掘・育成のための日本初の野球学校である。なおドミニカでは、米国メジャーリーグ三〇球団のうち二八球団がドミニカにアカデミーをもつほど、世界でも野球の盛んな国である。

(7)

ハイチ革命で黒人・ムラート勢力が政権を握ると、旧宗主国のフランスや欧米列強の介入、再支配を恐れて、プランテーション農園の没収、白人プランターの追い出しをはかって、その土地を農民に再配分した。しかし、従来の農工一体型の砂糖生産では、監督者としての地位にあった有色人、黒人を除いては、整地・植え付け・収穫・粗糖生産の複雑な工程全体を把握できる奴隷はほとんどいなかった。徹底した分業のごく一部を割り当てられたにすぎず、革命後にハイチの砂糖生産は忌避され、一気に落ち込んだ。むしろ、自作地での家族の食糧作物を栽培して確保しつつ、農産品を販売する家族農業形態では、コーヒーの方が山岳傾斜地でも栽培可能でかつ導入も容易であった。サトウキビは熱帯の肥沃な平地での栽培、糖分減少を押さえるためにできるだけ収穫地の近くで製糖することが必須である。この条件を満たす農工経営は新たに生まれた解放黒人や有色人契約移民には困難であった。

(8)

スペイン王室の支援で行なわれたコロンブスの第一回航海は、黄金と香辛料の産地インディアスへ赴くのが目的であった。インディアスは本来ブトレマイオスの地図でアジア全域に付された名称で、

(9)

スペインが発見・征服・植民した地域の総称として使われた。スペイン王室はこの名称に長くこだわり、アメリカ大陸の統治機関をインディアス諮問会議、そのための法をインディアス法と呼んだ。イスパニョーラ島でスペインが初期に開発したのは、最初に金が採取できたシバオ渓谷を含む北部のイサベラからサンチャゴ（Santiago）からラベガ（La Vega）、サントドミンゴにかけての東部の回廊地帯にすぎなかった。そこは先住民であるタイノ人が多く住む豊かな地域でもあり、一連の砦を築いてこの地域の首長権力を排除しようとした。その他の地域については、ほとんど未開発であった。「コロンブスは優れた船乗りであり、才能に恵まれた探検家であったが、行政能力を欠いていた」（クラウス 二〇〇四 二四三頁）という評価は、金銀探掘が第一目的で、統治は二の次であったことの証左である。しかし統治は膨大な資金を投入しているスペイン王室にとつては必要なことであった。タイノ人とコロンブスらの統治者との現地での関わりや支配の状況を、文化地理学者サウアーは晩年の著書で淡々と記述している（Sauer 一九六六）。スペイン国王は最終的にはコロンブス一家による統治を断念し、一族は不遇な晩年を送ることになる。

(10)

交差ヴォールトの稜線の下に太いアーチを渡して補強した曲面天井。肋穹窿。

(11)

国際直通バスはサントドミンゴ・ポルトープランスが午前二便、サントドミンゴ・カパシアンが午前二便のみ運行されている。国境（前者がヒマニ Jimani、後者がダハボン Dajabon）での通関も含めて九一日を要する。長年運行している信頼のおけるバス会社はほぼ一社で、料金は三〇〜四〇ドルと安い。乗客はほとんどがハイチからの出稼ぎ者である。飛行機も両首都間の直行フライトは二社の運行で朝夕二便しかない。

(12)

カパシアン市街から北西一〇キロメートルにあるラバデー（Tabate）は、クルーズ船が着岸できる専用埠頭をもち、周囲を完全に壁で囲まれたたプライベートビーチである。マイアミに本拠をもつカリ

ブ海最大手会社のクルーズ船が定期的に来港し、オールインクルシ  
ープでリゾートを満喫できる。カリブ海域でもこれほど庶民の生活  
と落差が大きい場所はないであろう。

- (13) カバシアンはベシヨンヴィルの富裕層の別荘地ともなっている。ま  
た、アメリカ海兵隊による占領(一九一五―三四年)の名残で、南  
北の通りはアルファベット、東西の通りは数字の呼称がつく。

- (14) ハイチ国は一八〇六―一一年まで存在した北部を中心とした政体で、  
ポルトープランスを含む南部はハイチ共和国という別の政体であっ  
た。前者が一八一一年から二〇までハイチ王国と名乗った。

- (15) アメリカ合衆国農務調査 Economic Research Service, U.S. DEPART-  
MENT OF AGRICULTURE [https://www.ers.usda.gov/topics/crops/rice/  
rice-sector-at-a-glance/](https://www.ers.usda.gov/topics/crops/rice/rice-sector-at-a-glance/) (二〇二一年七月閲覧)。二〇二二/二〇二二  
一六/一七年度の平均で、一位がメキシコ八三七千トン、二位がハ  
イチ三九四千トン、三位が日本三一六千トン、四位ベネズエラ二四  
六千トンである(玄米換算)。この大量の米輸入によって、ハイチ国  
内の自給的米生産は壊滅的な打撃をうけた。

- (16) 元、在ハイチ日本国大使の八田善明による一連のハイチ事情。 [http://  
www.apic.or.jp/projects/haiti006.html](http://www.apic.or.jp/projects/haiti006.html) (二〇二二年八月閲覧)

- (17) 一六四五年にフランス自体がこの島での海賊の定着を図り、娼婦や  
黒人奴隷を輸入している。一六七〇年代から海賊の時代に陰りが見  
え始めたため、島の木材を切り出して貿易を開始していく。ウェー  
ルズ出身の海賊として名高いヘンリー・モルガンはジャマイカのポ  
ートロワイヤルを拠点にして船員を募り、この島を訪れている。

- (18) ブードゥー教の要素が強く、黒人女性神官の指示により黒豚の腹を  
括る儀式で蜂起が始まったとされる(浜忠雄 二〇〇七 二四―二  
五頁)。この場所もカバシアンの郊外である。

- (19) 世界銀行統計による一九七四年の人口は、ドミニカ五〇一万人、ハ  
イチ五〇〇万人であったが、二〇〇〇年にはドミニカ八四七万人、  
ハイチ八四六万人である。この四半世紀で人口は一・六倍となった。  
その後はハイチが常にドミニカの人口を上回っている。しかしその

- (20) 上昇カーブは両国ともほぼ一次曲線で、きわめて類似している。  
ドイツのポーターランドを考察した浮田(一九八三)は地理学的視  
点としてその文化景観の違いを重視する。

- (21) 治安の悪さや安全性、公共インフラの未整備から、「カリブ海」を対  
象とする世界の観光ガイドブックでも、ハイチの項目は意図的に非  
掲載またはきわめてわずかしかがページを割いていない。たとえばア  
メリカのペンギン・ランダムハウス社のオールカラー版の *Eyewitness Travel* シリーズには多くのクルーズ情報や、リーワード諸島や  
フランス領アンティルには多くのページが割かれているのに、ハイ  
チは項目すらない。『地球の歩き方 キューバ パハマ ジャマイカ  
カリブの島々』でもキューバが中心で、その他のカリブの島々の一  
部としてドミニカ共和国の記事はあっても、ハイチの記載はない。  
オーストラリアのロンリープラネット社の『カリブ海諸島』 *Caribbean Islands* (二〇一七) が、ポルトープランスとカバシアンを中心  
に独立して立項しているにすぎない。ハイチ出身で、パリのソルボ  
ンヌ大学でドミニカ共和国とハイチの関係を地理学的視点から研究  
し(Thédrot Jean-Marie 2003)、現在はハイチ大学で教鞭をとるテオ  
ダは、ドミニカ共和国ではハイチ革命についてほとんど何も教えず、  
若者たちはトゥサン・ルヴェルチュールやデサリーヌなどの革命指  
導者の名前も全然知らないというエピソードを山岡は記している  
(山岡加奈子 二〇一八 一七一頁)。
- (22) カリブ人は漁撈・狩猟採集民族で二三世紀頃に南米大陸から移住し  
てきた同ビアラワク語系の後発の民族集団とされる(国本伊代編  
二〇一三 二三八―二四一頁)。

#### 参考文献

- アーヴィング・クラウス(杉野目康子訳) 二〇〇四 『タイノノーコロ  
ン  
プンスが出会ったカリブの民』 法政大学出版局(原著は一九九二年)  
アラン・テイラー(橋川健竜訳) 二〇二〇 『先住民 vs. 帝国 興亡のアメリカ  
カ史―北米大陸をめぐるグローバリズムの歴史』 ミネルヴァ書房(原

著は二〇一三年)

アルフレッド・W・クロスビー(佐々木昭夫訳) 二〇一七 『ヨーロッパ  
帝国主義―生態学的視点から歴史をみる』筑摩書房(原著は二〇一五  
年)

今野俊彦・高橋幸春編 一九九三 『ドミニカ移民は棄民だった―戦後日系  
移民の軌跡(世界人権問題叢書一)』明石書店

浮田典良 一九八三 『国境地域の人文地理学的研究―ドイツ語圏における  
近年の研究動向』人文地理 第三五巻六号、三八―五四頁

川名秀之 二〇一〇 『世界の環境問題―第6巻 極地・カナダ・中南米』  
緑風出版

国本伊代編著 二〇一三 『ドミニカ共和国を知るための六〇章(エリア・  
スタディーズ一三二)』明石書店

国本伊代編著 二〇一七 『カリブ海世界を知るための七〇章(エリア・  
スタディーズ一五七)』明石書店

佐藤幸男 二〇二〇 『海と島嶼』(現代地政学事典編集委員会編『現代地  
政学事典』丸善出版、四七六―四七七頁)

シドニー・W・ミンツ(川北稔・和田光弘訳) 二〇二一 『甘さと権力―  
砂糖が語る近代

ジャレド・ダイアモンド(楡井浩一訳) 二〇〇五 『文明崩壊―滅亡と存続  
の命運を分けるもの(下)』草思社(原著は二〇〇五年)

高橋幸春 一九八七 『カリブ海「楽園」―ドミニカ移住三十年の軌跡―潮  
出版社

野間晴雄 二〇二一 『春はまだ来ぬか』千里地理通信 第八四号、一頁  
浜 忠雄 二〇〇七 『ハイチの栄光と苦悩―世界初の黒人共和国』刀水書  
房

布野修司・ヒメネス・ベルデホ ホアン・アラン 二〇一三 『グリッド都  
市―スペイン植民地の起源、形成、変容、転生』京都大学学術出版会

マーク・アロンソン、マリナ・ブドース(花田知恵訳) 二〇一七 『砂糖の  
社会史』原書房(原著は Marc Aronson and Marina Budhos. 2010. *Sugar*

*Changed the World*, 2010)

水谷裕佳 二〇二〇 「マルチネス・モデル」(現代地政学事典編集委員会

編『現代地政学事典』丸善出版、四七四―四七五頁)

桃井治郎 二〇一七 『海賊の世界史―古代ギリシアから大航海時代、現代  
ソマリアまで』中央公論社

山岡加奈子編 二〇一八 『ハイチとドミニカ共和国―ひとつの島に共存す  
るカリブ二国の発展と今(アジア研選書四八)』アジア経済研究所

Carl O. Sauer 1966. *Early Spanish Main*. Berkeley: University of California  
Press.

Lonely Planet 2017. *Caribbean Islands*. 7th edition, Lonely Planet Global Lim-  
ited.

Oscar J. Martinez 1994. *Border People: Life and Society in the U.S.-Mexico  
Borderlands*. University of Arizona Press.

Theodrat Jean-Marie 2003. *Haiti-République Dominicaine: Une file pour deux*.  
1804-1916.

US Department of State, The Geographer Office of the Geographer Bureau of In-  
telligence and Research. 1961. "International Boundary Study No.5-Domi-  
can Republic - Haiti Boundary".

(関西大学文学部教授)